

松平定信とその時代②

「松平定信」の登場

江東区深川江戸資料館

江東区白河の^{れいがんじ}靈巖寺には、国指定史跡「松平定信墓」があります。江東区が成立した昭和22年、この地域が「深川白河町」と名付けられたのは、この松平定信が、^{もつ}陸奥国白河藩主であったことに由来しています。白河1丁目にある深川江戸資料館は、この時の江東区役所の跡地です。江東区の中心地を意味し親しまれてきた「白河」の地名の元となった松平定信とは、どのような人物だったのでしょうか。寛政の改革を推進した老中として有名な彼ですが、幕政に登場するまで、どのような少年時代を過ごし、白河藩ではどのような仕事をしたのでしょうか。

今号では、^{ごさんきょう}御三卿のひとつ田安家に生まれて幼名を賢丸と^{まさまる}いった彼が、白河藩主松平定邦の^{さだくに}養子となつて、広く知られる「松平定信」の名に改名し、藩政の舞台に登場するまでの前半生を見ていきます。

(1) 『宇下人言』

以下で、定信の書き残した自伝「^{うげのひとごと}宇下人言」を史料として、彼自身の語る少年時代を見ていきたいと思ひます。まず、『宇下人言』という書物について触れておきたいと思ひます。

書名の「宇」「下」「人」「言」は、2字づつを組み



松平定信公184回忌の墓前祭(2013年6月)。
白河1丁目町会や江東区長の花が並び、地元との結びつきが
ふかいことがわかる。

合わせると「定」「信」となります。三重の箱に入れられ松平家に伝来していたところ、明治期に自然と封がほどけたといわれています。昭和3年(1928)、翌4年の定信100回忌を前に、当時の当主松平定晴氏によって初めて活字化されて公になりました。

その後、次の松平定光氏の校訂によって岩波文庫に収録され、広く流布することとなりました。

『宇下人言』を封じた箱には、「子孫老中になり^{そうろう}候ものは一覽有^{いちらんこれある}之べし。しかし他見は決てあるまじく(下略)」とあり、自身の老中在職中の諸政策の記録を参考として子孫に残そうと意図したものであったことが知られます。「虫喰^{むしくいそうろう}候とも虫干^{むしくわい}に不及^{およばず}」とも記されており、広く公にしようとしたものでないことを定信自身が強調しています。

(2) 幼時のこと

定信(田安賢丸)は、宝暦8年(1758)12月、御三卿のひとつ田安^{むねたけ}宗武の子として江戸で生まれました。第七子ですが、彼が生まれたとき、長男から四男まではすでに亡くなっており、五男の^{はるさど}治察から数えて「第3子」とする場合もあります。

父・宗武には^{ようせい}(天逝の子)もありましたが)15人の子があり、『宇下人言』によれば、「兄弟が多かったので」食事や着物などにひとりひとりの好みが反映されることなどなかったようです。このことは、がまんすることが身につく、後に質素儉約を苦痛と思わず推し進める力となったと定信は述懐しています。

とはいえ、將軍の家族の扱いを受ける御三卿の家のことです。庶民の質素とは異なるものであったと思われれます。13歳頃までは、年に1~2度は登城して將軍に^{はいえつ}拜謁していたとあります。中でも5歳のころ、田安邸が火事になった時は、10代將軍家^{いえはる}治の配慮でしばらくの間江戸城で過ごし、將軍に大変かわいがってもらったと記述しています。

身体は丈夫ではなかったが、学問を好み、7歳で「孝経」を読み、12歳頃には著述を始め、和歌や詩にも

親しんで行きました。学問（儒学）の師は大塚孝綽^{たかやす}という人物でした。11歳のころ治国の道について学ぶようになり、12歳の時に書いた『自教鑑』という著述は、大塚氏の添削^{てんさく}により良いものとなって父に褒められた、とあります。このころから弓、槍、乗馬、剣術^{さるがく}、猿楽を習ったとあります。

14歳になった明和8年(1771)父が57歳で死去し、兄の治察が家督を相続しました。

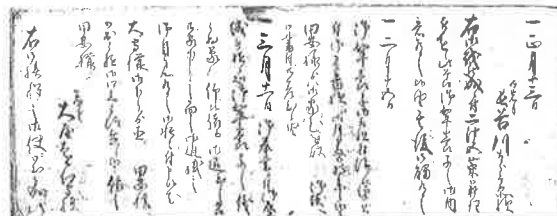
(3) 「松平定信」の誕生

17歳(安永3年)の3月、「將軍の命により」陸奥国白河藩主松平定邦の養子になることが決定します。兄・治察は、生前の父の言葉を賢丸に伝えます。『宇下人言』に「治察卿は兄ながらも親父の恩あり」と述べられています。安永3年(1774)4月には、賢丸は定邦から贈られた「定信」に改名しました。「松平定信」の誕生です。

しかし、その兄もまもなく22歳で死去し、田安家の人びとの養子撤回の望みも聞き入れられることなく定信は、松平家に引き移ることになりました。兄の死去、妹の將軍養女の決定と続き「田安家にはさびしいことばかりで、みな涙を流し賢丸を送り出したけれど、松平家では大変な喜びをもって迎えられた」様子が『宇下人言』ばかりでなく、桑名市中央図書館に残る『定信公御引移之一件抜書帳』の記述からもうかがわれます。

安永5年3月、定信は養父とともに初めて白河におもむき、小峰城に入りました。4月、將軍家治の日光社参に際し下野に隣接する白河の警護を勤めるためでした。5月に勤めを終えて江戸にもどり、19歳で元服して養父の娘峯姫と結婚しました。

峯姫にはこの時『難波江』



『定信公御引移之一件抜書帳』桑名市中央図書館蔵



白河藩小峰城

という書物を書いて贈っています。後年、「若いときの稚拙な作品だが、亡くなった人が愛着を持って手にしたことを思うと捨てることはできなかった」と述懐しています。峯姫は、天明元年(1781)に28歳で死去しています。

(4) 定信の初期の白河藩政

天明3年(1783)養父定邦が隠居し、定信は越中守と官名を改め、翌4年に白河に初入部しています。飢饉^{きうきん}のため白河城下でも打ちこわしが起こった翌年の事でした。定信はまず窮民対策^{きゆうみん}に着手しています。

そのほか天明4年、城下に目安箱^{めやすばこ}を設置し、続いて藩立の学問所を設置し、自ら『大学』を講義しました。

藩の支出を前年より20パーセント削減して財政改革を図ろうと試み、あわせて記録を整備し、それをもとにしてさまざまな面で藩の基準を決め、諸役人の心得などを規定していきました。

『宇下人言』には、飢饉であったにもかかわらず、白河ではひとりの餓死者も出さなかったと述べられています。統計に表れないようなところや把握できないようなところにも餓死者はいなかったのか、本当に漏れのない統計であったのか、それはわかりません。しかし、定信の藩政への意欲と決心がうかがわれる施策の数かずであったといえるでしょう。